

東日本大震災と岩手県高体連

一県高校総体総合開会式と北東北 I H への取り組みをめぐって一

岩手県高体連事務局

岩手県立盛岡第三高等学校

松尾 和彦

1 はじめに

東日本大震災から1年6か月が経過した。震災直後に比べると、避難所から仮設住宅等に移り、道路等も復旧が進み、被災地域の生徒達も学校に通う毎日となった。学校での教育活動は、全国からの多大な支援により通常の教育活動に戻りつつある。ただし、生徒達を取巻く環境は、失職した保護者の雇用問題、地域経済や流通面での復興の遅延、文化施設や体育施設の流失など、まだまだ不便で不憫な状況は変わらない。全国版の新聞やテレビでの被災地報道は、極めて少なくなったが、地元の新聞では、連日のように被災地関係の記事や被災者や支援応援者からの声・情報の欄が続いている状況である。

この発表では、大震災前後の岩手県高体連及び高校生のスポーツ・体育活動の紹介と報告を通して全国からの支援に感謝したい。また、大震災により改めて考えさせられたスポーツの意義や可能性、スポーツを通じた絆について検証したい。

ここで岩手県の風土について、広大な本県の地理・県民意識を紹介。

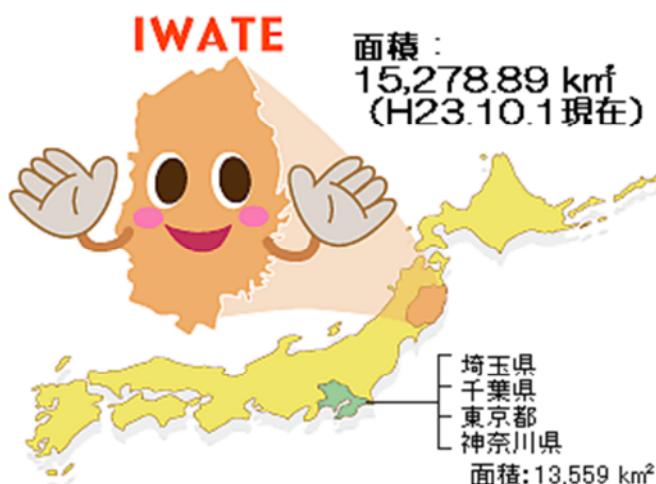
■県の面積

岩手県は本州の北東部に位置し、東西約 122 k m、南北約 189 k m と南北に長い楕円の形をしている。その広さは北海道に次ぐ面積であり、国土面積の 4% を占めている。

【他都道府県の面積と比べてみると・・・】

・埼玉県＋千葉県＋東京都＋神奈川県

13,559 平方キロメートル



岩手県の内陸部の大部分は山岳丘陵地帯で占められ、西側には秋田県との県境に奥羽山脈があり、これと平行して東部には北上高地が広がっている。そして、この二つの山系の間を北上川が南に流れ、その流域に平野が広がっている。

沿岸部は、宮古市より北では、典型的な隆起海岸で、海食崖や海岸段丘が発達している。特に 200m の切り立った断崖が 8 km にわたって連なっている田野畑村の北山崎は、圧巻の一言。一方、宮古市より南側は北上高地の裾野が沈水してできた、日本における代表的なリアス式海岸で、対照的な景観をみせ、久慈市以南の海岸線は陸中海岸国立公園に指定されている。また、その沖合いは世界有数の三陸漁場となっており、優れた漁港・港湾にも恵まれている。

岩手県の気候は、このような地理的条件によって特徴づけられている。奥羽山脈の山沿い地方は、冬に雪の多い日本海側の気候を、北上高地は高原性、盆地性の気候を示している。また、北上川沿いの平野部は、全般的に冬は寒さがきびしく、夏は暑い内陸性の気候を示す。沿岸部では海洋性の気候を示すが、宮古市以北では寒流の影響のため全般的に気温が低く、冷害などの気象災害がおこりがちである。

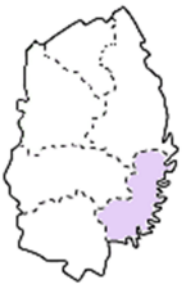
穏やかな海岸線が続く沿岸南部では、夏になると多くの海水浴客でにぎわった。国指定名勝の高田松原や浪板海岸などが有名であった。

◇高田松原

気仙川の河口から広田湾に沿って続く弓形の砂浜で、陸中海岸を代表する海水浴場。樹齢300年を越える数万本のアカマツやクロマツの林が2Kmにわたって伸びていた。海水浴のほか、ウィンドサーフィンやヨット、シーカヤックでの利用も多くみられた。

◇浪板海岸

南北約800m、寄せる波はあっても返す波のない世界でも珍しい「片寄せ波」の海岸。白い砂浜と松林、透き通った青い海は海水浴場として人気があった。



2 北東北インターハイの開催をめぐって

北東北総体に向けて準備をしていたが、震災により会場地変更など大幅に計画変更をしなければならなかった。被災地である宮古市で開催予定だったレスリングとヨットは会場変更を余儀なくされ、レスリングは本県八幡平市、ヨットは秋田県由利本荘市の協力で開催することができた。

全国の様々な方々から、たくさんのご支援をいただいた。被災した学校に直接競技用具を届けていただいたり（ヨット・ボート・カヌー等）、IHに出場した選手が被災地でボランティア等の交流を行ったり、複数の専門部・競技協会から支援金を頂いた。ありがとうございます。全国高体連等国内外からの支援金は総額4千万円を超えた。

本県勢の入賞数は（8位以上）は優勝4を含む44と、前年の23（優勝ゼロ）からほぼ倍増した。平成11年岩手インターハイ以降では最高成績となった。ここ数年は20～30前後で推移していただけに大躍進といえる。上位入賞が多かったのも健闘した証拠。12年ぶりに県内が会場となった大会で奮闘した。

競技・運営補助員として、県内52校から2,863人が協力し、それぞれの会場地で高校生活動を展開した。そのテキパキとした行動ぶりは全国からいらした大会関係者から高い評価を頂いた。



レスリング会場に掲げられた支援旗（徳島県高体連）



支援旗（宮崎県高体連）

【全国高体連ヨット専門部古屋委員長のコメント】

「津波は全てを押し流したが、高校生たちは臆することなく、海に挑み、打ち勝ってきた。その姿は復

興を進める東北の人たちに届いたはずだ。スポーツが持つパワーを感じることができた大会であった。大会に携わったすべての関係者・応援いただいた皆様に感謝したい。」



秋田さきがけ新聞 平成 23 年 8 月 18 日付

3 岩手県高等学校総合体育大会の開催

(1) 総合開会式を継続している意義

岩手県では、県総合体育大会総合開会式を実施している。県高体連として、スポーツ活動や運動部活動の支援及び大会運営や選手強化事業だけでなく、高体連活動を通しての「生徒の健全育成」や「母校への帰属意識」を育んできた。全国的には、総合開会式を縮小廃止する県が多い中、本県は昭和 33 年第 10 回大会以降全県の学校から応援団が参加する形式で継続している。

表 1 総合開会式参加規模

	震災前 (2010 年 5 月)	震災直後 (2011 年 5 月)	今年度 (2012 年 5 月)
参加校数	82	84	82 校
行進人数	1,563	2,267	2,373 人
応援生徒数	14,377	12,924	12,967 人
引率教員数	969	913	932 人
小計	16,909	16,109	16,263
式典役員数	119	121	129 人
式典補助員数	662	690	751 人
小計	781	811	880 人
合計	17,690	16,920	17,143 人

（２）参加校の意識

総合開会式のあり方については、「職員・生徒の負担が大きすぎる。」「移動経費がかかりすぎる。」「総合開会式の意味があるのか。」という反対派や、「愛校心・郷土愛を育むために必要である。」「県内全ての学校が揃う貴重な場である。」という賛成派など、意見は分かれていた。

平成 17 年に県内の教職員・生徒を対象に意識調査を実施した。調査結果は、教職員・生徒ともに継続賛成が過半数を超えた事を踏まえて、今後も一部修正しながら継続していくこととした。参加各学校生徒は 1 年生が中心であり、高校生としてのデビューの場としてとらえられている。

表 2 「総合開会式に関する調査」対象；県内高校教職員 3,079 人 平成 17 年 11 月実施

【今後、総合開会式を継続することについてどうお考えですか】

現行どおりの開催形態で継続してよい	985 人	32,0%
一部修正する必要があるが継続して良い	710	23,1
総合開会式は不要である	1,318	42,8
その他	66	0,2

（３）震災直後・今年度の様子

震災直後（2011 年 5 月 20 日）

12 時 20 分、計 84 校の選手団の入場。観客席からの大きな声援に応えるように、選手たちは力強く入場行進を行った。今回の震災で大きな被害を受けた沿岸地区の学校が入場してくると、スタンドからは一段と大きな拍手が送られた。

開式に先立ち、東日本大震災の犠牲者を悼み黙祷が捧げられた。その後、山田市雄県高体連会長が「選手団の力強い行進、元気あふれる応援は岩手県の高校生の絆の強さ、復興に前進していく確かな足取りを感じさせてくれる。震災に負けずに、明日に向かって突き進んでいくはつらつとしたプレーで、県民の皆さんに勇気・元気・希望を与えてほしい」と、開式を宣言した。

選手団を代表して、松村将寿選手（釜石高校 3 年）は「お世話になったすべての人に、感動と勇気を与えられるよう、持てる力を出し切ります」と、宣誓を行った。

開会式後、日本ユニセフ協会、県高体連の呼びかけに応じ、大山加奈さん（バレーボール）、中村真衣さん（水泳）、千葉真子さん（陸上長距離）、末續慎吾選手（陸上短距離）が会場に駆けつけ、県内高校生の代表である不来方高校音楽部・盛岡第一高校応援団等とともに選手団を激励。

被災地の釜石商工高校の代表選手のひとり、は、「心のこもったメッセージをきけてうれしかった！いっぱい勝てそうな気がする」と嬉しそうに話した。また、釜石高校の生徒のひとり、は、「アスリートの方が 4 人も岩手まで来てくれたなんてすごい！歌や応援もあって、記憶に残る 1 日でした」と、興奮した様子で語った。多くの選手から「嬉しい！すごい！」という声上がり、子どもたちの笑顔が溢れた。

晴れ渡る青空の下に集った約 1 万 6 千人の高校生は、全力プレーで岩手県を元気づけることを改めて誓い、8 月の「北東北総体（全国高校総体）」出場を目指す。

震災直後であっても開催した。県全体に自粛ムードがある中で、どうあるべきかの議論を何度も重ね実施に至った理由は、「県民に、来場者に、被災した沿岸部の高校生に元気を与えよう！」。

ユニセフからの援助、サプライズゲストとして駆けつけてくれたオリンピックの激励、全国の皆様からのたくさんの支援をいただき、実施することができた。感謝しております。

「総合開会式のあり方」を再検討する時期はいずれ来る。被災地の復興支援という新たな意義が加味された事は、今後の継続に関する議論において大きな判断材料になると考えられる。

もうひとつ、本県高校生の意識を知る材料として、高体連加盟率の高さを参考にしていきたい。これまでの、本県教職員・生徒の実態を表す資料となるのではないだろうか。本県では、ほとんどの高校で全生徒が部活動に所属することを義務付けており、全職員が部顧問となっている。部活動へ参加することに対して意識が高く、生徒・教職員・保護者それぞれが共通認識をもっている。

表 3 本県高校の生徒数と高体連加盟人数（硬式・軟式野球を含む）

	生徒数	加盟人数	加盟率
平成 9 年	54,473 人	31,457 人	58.8%
10 年	53,394	30,664	58.5
11 年	52,855	30,487	58.7
12 年	52,391	30,154	58.6
13 年	50,796	28,935	58.0
14 年	49,224	28,244	58.5
15 年	47,485	27,411	58.8
16 年	46,249	26,249	57.7
17 年	44,500	26,109	59.7
18 年	43,343	25,233	59.2
19 年	42,449	24,936	59.7
20 年	41,545	23,927	58.6
21 年	40,503	23,483	58.9
22 年	39,750	22,674	58.0
23 年	38,786	22,335	58.5
24 年	36,710	22,306	60.8



スタンドに陣取る各校応援団



「ご支援ありがとうございます」と書かれた横断幕と共に入場する岩手県立大船渡高等学校の選手団



「笑顔・感謝・前進」と書かれた横断幕を掲げ、力強く行進する岩手県立大槌高校の選手団



選手団を激励する大山加奈さん、中村真衣さん



選手に声をかける末續慎吾さん

4 被災した高校の状況

岩手県高等学校体育連盟と岩手県が連携し、被災した高等学校生徒の大会出場が可能となるように以下の支援を行っている。

(1) 日常の部活動に対する支援

- ①岩手県高等学校体育連盟、競技団体及び県内外の学校から競技用具、練習着等の提供支援を行った。
- ②近隣地区の高等学校施設の相互利用のほか、内陸部学校の協力により、合同練習や合宿等の交流の機会が増えており、活動の場が提供されている。

(2) 大会出場に対する支援

- ①被災地の学校が大会出場に向けて負担軽減が図られるよう、民間団体への情報提供や調整を行い、被災者への宿泊費、交通費などの支援を進めている。
- ②主催者、競技団体に対して、被災地の生徒への参加料の軽減、競技用具の提供、大会参加への柔軟な対応等の要請を継続して行っている。

(3) 通常の活動に支障をきたした学校

陸前高田市

・高田高校

学校はすべての施設が全壊したため、旧大船渡農業高校校舎を使用しているが、部活動はサッカー・ソフトボールを除き、現在も他施設に移動しての活動となっている。

(野球部) 住田球場・住田高・大船渡東高・釜石平田球場

(バレーボール部) 大船渡高・大船渡東高

(バスケットボール部・卓球部) 大船渡東高

(剣道部) 住田高

※移動手段は、NGO「国境なき子どもたち」の支援によるバスを利用している。

支援バス…全5台(通学用2台・部活動用3台) 運転手は、県から派遣。

山田町

・山田高校

現在はすべての施設が使用可能になったが、震災後から約1年間グラウンドは半面が災害対応施設と駐車場で使用不可、残りの半面で野球部とサッカー部が使用していた。第1体育館は避難所で使用不可。格技場は物資置場で使用不可。第2体育館でバレーボール部を中心に使用しているほか、山田中学校に移動して、バスケット、テニス部が合同練習を行っていた。相撲部は大槌町ふれあい総合運動公園に移動して活動した。



震災直後のボート部艇庫



全国から届いた支援物資

5 まとめ

大震災で被災した地域は、復旧復興の途中である。「今日」の活動はできるものの、「1年後、2年後」の活動には不安を抱いている。

全国からの支援に感謝しながら、県高体連として被災生徒への支援を今後も継続し、将来にわたってスポーツに興味を持ち、活動を実践していく生徒を育成することとしたい。

高校生が部活動を行うことは、被災者を直接手助けするわけではない。それでも仮設住宅に暮らし、先行き不安な人々が、高校生の大会会場に集まり、大声で応援してくれるのを見た時、「スポーツの力」を感じた。熱い応援に楽しさを感じたり、ストレス発散ができたりした方もいたと思われる。損得抜きに感動を共有できたのではないか。地域の人々から必要とされていることも、高校スポーツ活動が成り立っている理由の一つではないか。高校生も支援への感謝を示すため、どんな状況でも前を向いて戦う姿勢を見せてくれた。今後も、大切にしていかなければならないと感じている。

岩手県高体連として、教職員・保護者・地域住民の協力体制を維持しながら、部活動を通じて高校生の心身の健康と健全育成を図っていくことが重要である。